ロトルーのプラウトゥス三部作について

浅谷真弓

ロトルーの作品の出典はギリシア悲劇、ローマ喜劇、スペインのコメディア、イタリア喜劇、先行パストラルに大別され、そのうち、ローマ喜劇はいずれもプラウトゥスを原作とした三作である。最初が《メネクムたち》で、デイエルコウフ=オルスボエルによれば、1630年頃、次いで1636年から37年の《ふたりのソジー》、1638年の《捕虜たち》となる。ラテン語の知識を通して知られるギリシア悲劇に比べれば、(1)ローマ喜劇は格段に近付き易いが、原作に直接当たっているかどうかは定かでない。とはいえ、カエキリウスでもナエティウスでもなく、ましてやテレンティウスでない理由はあっただろう。(2)後世の評価はテレンティウスをもってローマ喜劇の洗練を根拠付けるから、選択の余地は残っていたと見てよい。
以下で三作を比較し、共通点を探りながら、他の作品群との位置関係を測って行きたいと思う。

I.《メネクムたち》の謎、あるいは取り違えと媒介

メネクム＝ソジクル(以下、混乱を避けるため、単にソジクルとする)は子供のころに拉致された兄弟の片割れを探す。六年の探索の旅の後、メネクム＝ラヴィ(以下、ラヴィ)のいる港町に流れ着く。結婚しても浮気の虫の治まらないラヴィと、反対に、恋することを知らない堅物に成長したソジクルとの対照が描かれて、幕が開く。(3)父親、名前、顔が同じで、生活環境だけが異なっている、というのが、幕開け前段の状況設定であるが、ひとりの女との出会いが彼らの運命を変える。
美貌の寡婦、エロシーは、ラヴィにしつこく言い寄られて辟易の日々を送っている。勿論、ラヴィには妻があるし、彼の悪い噂は町中、周知のことである。そんな浮気の相手になれば、自分の評判が落ちるのは明白だ。尤も、そこまで愛されて悪い気はしない、と本音を吐く場面もあり、ダイヤモンドの髪飾りは魅力的である。プレゼントを受け取って、エロシーが言う。

(I-3)EROTIE.

Quoiqu'indigne, monsieur, d'un présent de la sorte,

Puisque vous l'ordonnez, il faut que je le porte.

Qu'il est bien travaillé! j'admire sa beauté:

Tout ce que vous donnez à cette qualité.

このダイヤモンドが兄弟を結び付けていく重要な小道具となっている。エロシーとダイヤモンドを通して、兄弟はまず間接的につながる。エロシーの下僕によるラヴィとの取り違えに続いて、エロシーの取り違えが起こる。初対面の場が同時に、観客に事情を再度説明し、確認させ、今後の展開を予測させるよう仕組まれていた。一目惚れから始まる事件というパターンは他にもあったのだが。(4)

(II-3)EROTIE.

Qu'attendez-vous, monsieur, quand la porte est ouverte,

Moi dans l'impatience, et la table couverte?

(.....)

SOSICLE.

Dieux! le divin objet! Je me rends, Messénie,

Et puis résister à sa force infinie.

MESSENIE.

Il est vrai qu'elle est belle.

共通点として、父親、名前、顔に嗜好、趣味が加わったと言うべきなのか。エロシーには、つい先程別れたばかりのラヴィと目の前にいるソジクルとを弁別する方法が完全に奪われているので、ソジクルの言動は悪い冗談をすぎて狂気の徴に聞こえる。

(II-3)EROTIE.

Que cet homme est saisi d'une folie extrême!

Il renonce à son bien, et se maudit soi-même.

それに対し、ソジクルの方も、エロシーの上のような言葉を気を引くための手管と勘違いしてしまう。だから、続く場面でエロシーがラヴィに関する情報を提供しても、ソジクルはそれを適

確に受け取れない。取り違えられた時点で、もしや、と推理力を発揮することはないし、メネクムという兄弟共通の名前、モスクという父の名前、シチリアという出生地を言われて、不在の片割れに思いをいたすことがない。彼を探すことこそが、旅の、というよりむしろ、この六年間の生きる目的であったのに、だ。エロシーのソジクルに対する評価は極めて正しい。彼は既に狂気の人である。ここでラヴィはソジクルにとって、文字どおり、決定的に失われ、奪われた。エロシーに言われるまま、ラヴィになりすまし、下僕を残して彼女と共に去るソジクルは、もはや登場の時の陰鬱な男と同一人物と思われない。

(II-3)SOSICLE.

(.....)

Oui, je suis ce Ménechme, esclave de vos yeux,

Ces astres les plus doux qui brillent en ces lieux,

Dont l'unique douceur me conserve la vie,

Et m'anime au défaut de mon âme ravie.

主人のあまりの朴念仁ぶりに呆れたはずの下僕が、一転、今度はすべてを忘れて女について行く姿を見送るはめに陥る。

(II-3)MESSENIE.

Qu'il soit sourd maintenant à mes sages propos;

Gardant ce que je tiens j'ai l'esprit en repos.

Dieux! je tremblois de peur, car il est si facile

Que pour une faveur il en rend toujours mille,

Et que, pour le plaisir d'un repas seulement,

Il nous eût mis au point de jeûner longuement.

本人が言うように、ソジクルはそのメネクムとやらに変身し、魂を奪われ、(すなわちラヴィされ)、ラヴィの環境の中で別の狂気を演じる。周囲の人間にとって、エロシーに対する恋がソジクルとラヴィを同一人物と思わせる条件を強化して、以降の取り違えはますますレゾナヴルとなる。必然的に、同じことが他方のラヴィにも起こる。

(III-6)EROTIE.

Monsieur, je n'entends rien à ces jeux déplaisans,
Ne m'importunez plus, et gardez vos présens.
Votre joyeuse humeur s'est assez exercée,
D'autres soins maintenant m'occupent la pensée;
Adieu.(Elle rentre chez elle.)

双方が自分の下僕、食客たちの前で演じる二重の狂気、二組の取り違えの混乱状態は終幕近く、ようやく兄弟を引き会わせる。

(V-7)MESSENIE.
Que voyez-vous, mes yeux? ô prodige! ô merveille!
Je doute si je vis, je doute si je veille.
(A Ménecheme Sosicle.)
Mon maître est en deux lieux.Que vous veulent ces fous?
Je vais vous secourir et seconder vos coups.
(.....)
RAVI.
O toi, qui que tu sois, dont la main favorable
M'est encor cette fois au besoin secourable,
Seul ami qui me reste, auteur de mon repos,
Que ton secours me vient et m'assiste à propos!
SOSICLE.
Dieux! je vois mon image.

それでも、ほどけた紐の両端が、何度も同じ場所を行き来した末に堅く結ばれるように、一見無駄な取り違えが、二人の共通点を強く主張し、再会をレゾナブルに根拠付けるための媒介行為として機能していたことがわかる。各人の食客と下僕の証言。

ERGASTE.
Ce n'est qu'un même objet, je ne puis deviner
Qui des deux ce matin m'a réduit à jeûner.
MESSENIE.

Qui de vous est Ménechme? Oh! que j'ai d'espérance
Si je puis de vous deux faire la différence!
Si le ciel aujourd'hui favorise mes voeux,
Je trouve un seconde maître, et vous l'êtes tous deux.

以下、最終的な事実確認が行われる。

MESSENIE.

Mais quel est votre nom? tirez-moi de souci.

RAVI.

On m'appelle Ménechme.

SOSICLE.

Et moi Ménechme aussi.

MESSENIE.

Quel est votre pays?

RAVI.

Syracuse, en Sicile.

Mais las! depuis long-temps je demeure en cette île:
Je fus pris chez mon père en mes plus jeunes ans.

SOSICLE.

C'est lui, n'en doutons plus.Que mes voeux sont contens!

MESSENIE.

Et votre père a nom?

RAVI.

Mosque.

SOSICLE.

O dieux! ô mon frère!
O rencontre agréable! ô fortune prospère!

終幕の食客の結びは言い得て妙で、取り違えと媒介の性格を示してぬかりがない。

ERGASTE.

(....)

Si la soif, ce matin, m'a fait verser des larmes,

Qu'elle me va,　ce soir, faire verser de vin!

ここでの疑問は、だがなぜ二人がそこに至るまで互いに不審を抱かずにいたか、ということである。一方のラヴィの言い訳はたわいがない。

RAVI.

Oui, si j'en ai de vous le moindre témoinage.

SOSICLE.

Quand vous fûtes ravi, nous étions de même âge.

Orante est notre mère.

ソジクルの下僕が記憶を呼び覚まそうとすると、途端にあやふやになる。

RAVI.

Le temps n'a de ton nom effacé la mémoire.

下僕の名前を覚えていて、兄弟の名前を忘れるなどということがあるだろうか。他方のソジクルは恋によって理性を喪失したからだと言えば、言うことは可能だが、決して充分ではない。取り違えが媒介行為として機能するのに比して、媒介行為を阻害する要因がやや説得力に欠ける。周囲の人物が兄弟の類似性に欺かれるのはともかく、ラヴィとソジクルが推理や想像をしないという致命的な欠陥がある。しかし、認知の興奮、エロシーとの恋をめぐるエロシーやラヴィの妻らの誤解にまぎれて、問題が認識されずに終わってしまう。つまり、裏を返せば、全幕を通じて媒介を阻害するのは喜劇の登場人物に特有の粗忽さに限られるということだ。そしてその粗忽さこそが、兄と弟の関係、それを弁別して初めて可能になる互いの自己同一性を奪い、周囲の人物らに狂気と認定されるごときずれを生じさせていたのである。だから謎はむしろ、彼ら兄弟の外見上の相似にあるのではなく、内面の曖昧さにある。狂気と見做され、拘束、収監の危機に直面した彼らは、媒介者ともなりえた人物らの存在に助けられ、自己同一性を取り戻す。彼らの再認は、それぞれの兄や弟に対して行われるのみならず、自分自身に対しても行われたと言える。だが次に、そのような媒介者を持たない物語が取り上げられる。

II.《ふたりのソジー》、冥界同道

《メネクムたち》で、外見の相似が直ちに兄弟再会の手掛かりにならなかったのは、「単に、」彼らの粗忽さが原因だった。いや、それこそがこの喜劇の傑作喜劇たる所以だった。かくして馬鹿者という呼び名はこの喜劇の中で最も名誉あるものとなった。相互の弁別手段を喪失した瓜ふたつの兄弟という問題も、彼らが同時に今この場所に確かに存在している、その動かし難い事実によって一気に解決可能である。アリストテレスは言う、ある物事のなにであるか(本質)を言い表す説明方式が他の物事の本質を明らかにするそれと区別されえないときには、むろん説明方式それ自らはすべて(類と種差とに)分割されても、これらの物事は一つだと言われる。このように物事は、増大されても減少されても、それの説明方式が一つであれば一つである、と。[5]ただし、そのことを証言する人物がいれば、の話だ。証言者は、そっくりの、当の相手であってもかまわない。どちらかが、おまえはわたしではなく、わたしはおまえではない、と言ってくれさえすればいいのである。
ソジーの場合、事態は非常に込み入っていた。ジュピテールとメルキュールは、ジュピテールが恋したアンフィトリオンの妻アルクメーヌを恐れさせないよう、それぞれ、凱旋した将軍アンフィトリオンとその奴隷ソジーに化身し、彼女を訪れる。盗っ人の神様メルキュールは最初に奴隷の外見を奪うが、それのみで満足しない。[6]

(I-3)MERCURE, à part.
Prenons de sa figure et de son propre nom
Le droit de le chasser de sa propre maison.

彼は暴力的に外見と名前、身分、背負って来た過去までも奪い取られ、奴隷という身分が身分であるだけに、いっときさっぱりした気分になる。無理もない。

(I-3)SOSIE.
(.....)
De cet heureux malheur naîtroit ma liberté,
Et ce seroit me perdre avec utilité.
(Il sort.)

いつもよりやけに長い夜、自分が自分であることに自信をなくす恐怖をまだ、臆病な奴隷は心

底知ってはいない。目前の鉄拳の痛みから逃れ、奴隷の境遇から逃れた偽りの幸福感に、正常な判断力が麻痺している。ソジーの臆病さはメネクムたちの粗忽さと双璧である。彼から自己の同一性を取り上げたのは、暴力に屈する臆病さ、自分を信じ切ることのできない精神的な弱さなのだ。尤も、こんな彼を責めるのは筋違いだろう。これは喜劇だから。それに、彼は姿と名前を奪われても、ちゃんと自分の頭で何かしら考え、ひとりごとを言い、歩き、ソジーでないにしても確かに誰かではあって、しばし、揺らぐ自己同一性の危機とは一線を画していられるように見える。少なくとも感覚の上で、元ソジーにとって、現ソジーが「元」の存在を排除しないことは明らかである。実際、排中律、矛盾律は奴隷には無効である。(7)論理性とはとてもあいいれない、思考の緩さ、あるいは超人的弱さとでもいったものが彼をより深い恐怖から救っているのだ。他者との関係においては保証の限りでない、無根拠であるがゆえに妙に充実した、危機に際して緊急避難的に発動される自己の強い感覚に支えられている。刺激を受けて反射的に結束する、その瞬間だけの彼が存在する。
だが、メネクムたちには解決策だった、わたしはおまえではない、おまえはわたしではない、という呪文がメルキュールの口を通して告げられると、殆ど機能しなくなる。メルキュールは奪うだけで代わりのものを返してくれないからである。それどころか、では、おまえはだれだ、と後に続く。

(I-3)MERCURE.
Eh bien! suis-je Sosie? as-tu lieu d'en douter?
T'ai-je assez bien guéri de cette frénésie?
SOSIE.
Mais moi, qui suis-je donc, si je ne suis Sosie?

この難問に対しては、先程の無根拠な充実感などまったく意味をなさない。他者との関係において自己の位置を規定し、弁別する価値の体系から排除されたとき、絶対的な無価値の冥界が待っている。以前の奴隷は最下等の身分ではあるが、とにかく価値の体系の中にあったわけだから、その体系内の「無価値」とは次元がちがう。奴隷には懐疑をもって彼の存在を保証してくれるありがたい神がいず、人間を断念しなければならない。

(III-4)SOSIE.
Entrez, je vais voler, je ne marcherai pas.
(Il sort.)

主人に化けたジュピテールに易々と欺かれ、奴隷は再び彷徨する。彼の「神」とは、そういう神なのである。そして彼の彷徨に同道する主人の災難は、彼以上に既存の制度、すなわちジュピテールを権力の根拠とする価値体系に加担し、その恩恵に浴し、喪失しただけに深刻かつ重大で救い難い。他者の保証に強く依存した主人のありようは論理的でレゾナブルであるとも言えるが、奴隷のとは別の脆さがある。主人の生の充実感は存在を支えるに耐えない。彼自身の感覚より、妻の侍女の言葉の方が信頼に足る。

(V-5)AMPHITRYON.
Qui suis-je?
CEPHALIE.
Amphitryon.
AMPHITRYON.
De toute ma famille
La raison est restée à cette seule fille,
Ou leur aveuglement naissoit de leur dessein.
(.....)
AMPHITRYON.
Le ciel est trop soigneux de conserver mon nom.

しかし、奴隷のもう一柱の守護神メルキュールは、彼を殴りつけ、その痛みによって彼の存在を思い知らせるだけの力はある。論理的には無意味、無価値であっても感覚的には存在する矛盾を何と名付けるべきか。これもまた、奴隷にとっては「現実」なのだ。

(V-1)SOSIE.
Je suis mort! au secours! épargnez-moi, de grâce.
Sosie! hélas! ta main sur toi-même se lasse!
Tu frappes sur Sosie! Arrête, épargne-toi.

「死ぬ＝mourir」という動詞の一人称の活用は無効であるはずだが、絶対的無価値の冥界の住人になった奴隷はあえてそれによって自らの生存を主張することに成功する。別の自分に殴られ、対象化され、隷属させられながら、今ある自己の充実感を手に入れる奴隷の知恵と主人の論理

性はどこまでも異質だ。暴力的な(殴る＝考える)主体と無抵抗の対象と化した自己の恐るべき分裂に直面し、あろうことか、奴隷の祈りは当の権力主体にむかって差し出される。

(V-1)SOSIE.
Trêve, au nom de Mercure, à ta valeur extrême;
Je renonce à mon nom, je renonce à moi-même.
S'il vrai que Sosie aime de s'outrager,
Je ne suis plus Sosie, épargne un étranger.

この激烈に皮肉な状況を解消するために、奴隷はまたもやあの超人的弱さを発揮し、価値体系を二重化する作戦に出る。願い空しくメルキュールが去って、彼の生の充実感を支えてくれる主体が不在となれば、主人同様、彼の存在の根拠は、今度こそ論理的、制度的たらざるをえまい。

(V-1)SOSIE, seul.
(.....)
Soyons double Sosie au double Amphitryon.
Malheureux que je suis par une loi commune,
Cherchons le malheureux et suivons sa fortune;
Compagnon de son sort partageons son souci;
S'il périt, périssons; s'il vit, vivons aussi.
(Il sort.)

責任転嫁された主人は、先に見たように無事ジュピテールの許しを受け、妻の侍女の託宣で救い出され、その恩恵が奴隷に波及する形が取られる。が、主人を救い出したアリアドネの糸は余程緩かったのか、奴隷はまだ迷路の入り口に立って、来た道を振り返り振り返り、納得のいかない表情である。

(V-6)SOSIE seul.
Cet honneur, ce me semble, est un triste avantage:
On appelle cela lui sucrer le breuvage.
(.....)

奴隷はもはやただ臆病なだけの奴隷ではない。弱さの意味を知った。制度と権力と生きることの矛盾を身をもって体験してしまった後で、既存の価値体系の中に再認された自己の位置が安住の場所でないことくらい、見通せる。二度あることは三度あるのだ。これでは依然として、お前は誰なのか、という問題は解決されていない。メネクム兄弟が味わった自己との再会、認知の喜びがないのも当然だろう。思い返せば、彼らはあまりに無邪気だった。実に、彼は昔の彼にあらず、だ。それともメルキュールは奴隷の願いを聞き届け、役目に忠実に、過去の彼の「なにであるか」を奪い去り、別の代価を与えたのだろうか。但し、惜しむらくは、その代価の名前を奴隷は最後まで知らない。

III.解放された《捕虜たち》、その後

父は、敵国に捕虜として拘束されている息子と手持ちの奴隷とを交換しようとした。だがその奴隷こそ、既に売りに出されていたもう一人の息子だった。《捕虜たち》の骨子はこう要約できるだろう。[8]では、父が望んだ交換は成立しなかったのか。当初の目的から見ればそうである。しかし、彼の意図せざる交換はどうか。
第一幕、その女は捕虜の「フィロクラート」を恋していて、財産分与を条件とした結婚にふんぎりがつかない。許婚は、女友だちの行方知れずの兄である。彼女が恋する捕虜は、実はタンダールという、敵国の貴族フィロクラートに仕える奴隷である。既に一度、カードはすり替えられている。

(I-1)OLYMPIE.
Ecoutez: “A Philocate.”

PHILENIE, prenant la lettre.
O dieux!
Tu ne saurois, ma main, désauver mes yeux.
Cette lettre, il est vrais, lui portoit ma franchise:
(.....)

女友だちの父親は、息子に入ってくるはずの財産も欲しい。捕虜になっている二人の息子のうち、一人は消息不明で、残った一人だけでも取り戻そうと画策した父は、昨日買った奴隷と、残

りの息子を交換しようとする。第一の交換計画である。その昨日買った奴隷がつまりはフィロクラートとタンダールのコンビであった。

(I-3)HEGEE.

(.....)

Puisque de mes deux fils je n'avois plus que lui,

(.....)

Et je puis établir une attente solide

Sur l'achat que je fais des prisonniers d'élide.

Un entre autres, et riches, et puissant à le voir,

M'a flatté plus que tous de cet heureux espoir

Que son père, sachant ou' son malheur le range,

De mon fils et du sien moyennera l'échange.

(.....)

Le temps ne presse poiont, viens à l'heure ordinaire,

Et permets cependant que j'entre chez mon frère

Pour voir d'autres captifs qu'on me regarde chez lui.

女と父親にとって、問題は突如、焦眉となった。

第二幕、主人フィロクラートと奴隷タンダールの交換が行われる。

(II-5)PHILOCRATE.

(.....)

Souviens-toi qu'aujourd'hui ton nom est Philocrate,

Et que, pour profiter de ce déguisement,

Il faut changer de nom comme de vétement.

Tu mets ce bon office à sa gloire suprême

Si pour l'amour de moi tu crois être moi-même.

(.....)

TYNDARE.

Je suis donc Philocrate, et vous êtes Tyndare.

Depuis que de ce nom vous m'avez honoré,

J'en suis plus honn te homme et plus considéré;

(.....)

タンダールは後にエジェの息子と判明、この時父子は知らずに対面する。二人の関係をもしやと疑わせるほのめかし、暗示がばらまかれ、観客は行われつつあるカードゲームの規則を理解しはじめる。

(II-6)TYNDARE.

Quoi! votre fils captif?

HEGEE.

Oui, captif comme vous;

Le sort dessus vous seul ne lâche pas ses coups,

Et l'inconstant eût cru que mes vieilles années

Eussent, sans ce malheur, coulé trop fortunées.

(A Philocrate.)

Mais je vous veux parler; séparez-vous.Toi, viens,

Réponds sincèrement, et ne déguise rien.

N'es-tu pas son esclave?

PHILOCRATE.

Oui.

HEGEE.

Ton nom est?

PHILOCRATE.

Tyndare.

TYNDARE, à part.

La pièce a commencé, ma scène se prépare.

フィロクラートの身代金、財産を目当てに、父はその奴隷に、貴族の父親捜しを許す。自称フィロクラート、実はタンダールを人質に残し、主人は解放される。

(II-6)HEGEE.

Lui dois-je confier cette commission?

Oui, détachez ses fers et ceux de Philocrate.

(.....)

Venez quérir votre ordre et prendre un passe-port

Pour le premier vaisseau qui partira de port.

後から考えて見れば、敵国の貴族の捕虜が解放され、実子が残ったのだから、捕虜と実子の交換という目的を完遂したことになろう。勿論、来るべき事件に仕組まれた立派な伏線である。冷静になってはじめて汗が出る、そういう種類の皮肉だった。父は使者(奴隷)と人質(主人)との交換を計画する。父による第二の交換計画。

第三幕、タンダールの正体露見。

(III-3)TYNDARE.

(.....)

Donnant sa liberté, Philénie en veut une.

La mienne n'est plus mienne, elle est à la fortune.

タンダールの正体露見の場はかなりご都合主義的であるが、交換の妙手を見せるためには証言者の出現が必要で、その意味ではデウスエクスマキナの良き使用法とも言える。

主人同様、エリードの貴族で捕虜、クリジマンによる第一の認知。

(III-4)CRISIMANT.

Qui te fait, cher Tyndare, errant de toutes parts,

Et des pieds et des yeux éviter mes regards?

(.....)

HEGEE.

J'ai bien dès cet abord reconnu sa folie:

Il vous nommoit Tyndare.

(.....)

Viens ça, qui que tu sois, Philocrate ou Tyndare;

Il est temps de finir ce douteux entretien.

Es-tu né libre ou serf? ne me déguise rien.

TYNDARE.

Je suis né libre.

再び拘束が待ち受けている。以降、父子の会話はダブルミーニングの連続となる。

(III-5)HEGEE.
Liez, et jusqu'au sang serrez ce détestable,
Qui me rend de ces lieux et l'opprobre et la fable.
TYNDARE.
Ces liens à mes mains seront encor trop doux:
Vous les pouvez couper puisqu'elles sont à vous.

第四幕、フィレニーの恋人の正体判明、フィロクラートによる他方の息子の発見、拉致され、消息不明の息子の行方を知る奴隷の発見。

(IV-5)PHILENIE.
Né de condition à mon sort si contraire,
Tu serois pour toute autre et traître et téméraire:
(.....)
Oui, Tyndare, je t'aime et ne veux point de toi;
Je te serai fidèle et retiendrai ma foi;
(.....)

彼女の恋人は主人フィロクラートでなく、奴隷タンダールであるという第二の認知。残った交換の種明かしはただひとつだ。その前に、奴隷と入れ代わって鎖を解かれた主人フィロクラートが自分と交換される予定であったエジェのもう一人の息子を伴って戻って来る。主人は自分の奴隷とこの捕虜とを交換しようとしたのか。いずれにせよ、父は念願の息子の奪還に成功する。食客はその情報と今晩の夕食を等価に見積もる。

(IV-8)ERGAZILE.
Les dieux ne gardent rien, ils donnent toutes choses.
Ecoute à quel degré je relève ton sort,
Et quel comble de biens je t'apporte du port.

Ton esclave d'élide avec ton fils arrive;

(.....)

HEGEE.

Mon fils?

ERGAZILE.

Ton fils lui-même;

新しいものから古いものへ、裏返されたのとはちょうど逆の順番でカードが表へ返るように仕組まれた交換が最後の一枚に差し掛かる、第五幕。まずは帰還した息子クリゾフォルが、主人を信じて待っていた忠実な奴隷タンダール(実は兄弟)の解放を申し出る。エジェ自ら鎖を切るであろう、というタンダールの予言の的中。

(V-1)CRYSOPHORE.

Remettez en ses mains cet esclave fidèle

Dont avec tel succès il éprouve zèle;

Laissez-lui voir le jour, tirez-le de prison,

Et de sa liberté payez sa trahison.

最終的な第三の認知はこどもを拉致し、売った古い奴隷の告白で行われる。息子を買った金持ちの貴族こそ、フィロクラートの父テオドールだった。

(V-2)STALAGME.

Entrant dans la maison,

Comme il changeoit de sort on lui changea son nom;

Il s'appeloit Crisale, on le nomma Tyndare.

3、4、5 場は父子、兄弟、妹の対面に費やされる。調子に乗った父はクリゾフォル(タンダール)との結婚をフィレニーに強制し、まだクリゾフォルの正体を知らされていないフィレニーは頑なに拒否し、笑いを誘う。フィロクラートはどさくさ紛れにオランピーとの結婚の許可を得、また傍筋での奴隷同士の結婚成就が宣言されるなど、ウエルメイドコメディーの定石が用意されている。フィロクラートは奴隷(兄)タンダールの代わりにその妹を貰った格好だ。

以上に見てきたように、登場人物らは様々な形で役柄の交換にかかわっていた。各人が行った交換の収支を簡単にまとめてみよう。

1)タンダールは主人の代わりに自分自身を差し出し、出生証明、フィレニーとの結婚許可を得る。
2)フィロクラートは奴隷タンダールを差し出し、自身の自由、妻オランピーを得る。
3)クリゾフォルは奴隷タンダールの解放を進言し、兄クリザルを得る。
4)フィレニーは奴隷タンダールを失い、夫クリザル、財産分与を受ける。
5)オランピーは自分自身を差し出し、二人の兄、夫を得る。
6)エジェは捕虜フィロクラート、奴隷タンダール、娘オランピーを差し出し、クリゾフォル、クリザル、フィレニーの持参金を得る。

すべてに共通の項目は当然ながらタンダール(クリザル)で、ゲームの当事者である父が最初に選んだカードが実は何であったかがはっきりする。クリゾフォルはジョーカーではなく、クリザルが隠れた「当たり」なのだ。そしてカードは誰も気付かないまま、もとの位置に戻っていた。この結末は、自ら交換を媒介した男(父)の一人相撲、孤独な戦いの物語へと転換される。奴隷に身を窶したとはいえ、息子の姿を見分けることができず、自己の迷妄に苦しむ男は悲劇的でさえある。彼は危うく、今度こそ永遠にクリザルを失うところだった。
手品の種明しはいつもつまらない。捕虜の老人や逃亡奴隷の証言、告白に左右される認知はいかにも偶然すぎる。《捕虜たち》には、《メネクムたち》、《ふたりのソジー》の人物らが味わった危機、狂気、彷徨がなく、デウスエクスマキナが指し示し、運命のみが導く交換の鮮やかな手際、妙手があるだけだ。しかしそれがくせ者である。ソジーの主人ですら侍女の証言なしに自分が誰であるかを言えなかったのだ。まして市井の父親である彼は。だからこの芝居でも、偶然は偶然でなく、運命は必然であり、デウスエクスマキナは運命という権力主体に支えられた制度の施行者、証言者で、他者として保証を与えてくれる媒介者の機能を担って登場する。彼らは権力または権力軸の動揺、混乱である戦争状態から忽然と姿を現し、タンダールには出生証明、自由人の気概を、フィロクラートには失われた制度的自由を回復してやる。無力な父親を使って行われた交換ゲームの正体は、既存制度の回復、権力構造の再生産である。父親は交換の主体たろうと努力するが、権力の領土を侵犯し、地雷を踏む。彼が爆破されながら囲い込んでいく権力のありようには唖然とさせられる。ごく少数の例外を除いて、自分で「自分」をもつことなどできない、「自分」は制度が与えてくれるものだというのである。偽りの、自己の再認。
解放された捕虜はどこへ帰るのか。メネクム兄弟、ソジー、タンダールはもう自分探しの旅をし

ない。自らを引き裂くロゴスとモラルの鉄格子に背をむけ、ひそかに舌を出し、何事もなかったように暮らすのだ。交換も解放も無用だ。カードは既に目の前にある。そして彼らは永遠にそれを裏返すまい、と心に決めているようである。いつまでも、喜劇の登場人物でいるために。
当時の観客はこれらの喜劇の結末を見て、身につまされただろうか。作者は恐れと哀れみ[9]を喚起する意志はなかったと思うのが普通であろう。それを狙うなら、喜劇の名を戴いていないはずだ。実際、ロトルーはいくらでも悲喜劇や喜劇を書いた。しかし一度手元が狂えば、プラウトゥスの登場人物らも別の悲喜劇、悲劇の人物のように悲惨な最期を遂げたにちがいない。境界線はほんのひとまたぎ、まばたきをする間に越えられる距離にある。ジャンルを越え、作者に対し、取り違え、変装、(役柄の)交換を容認あるいは強制する社会的コードがあったのかもしれない。以降で、今回曖昧なままやりすごしてしまったこれらのキーワードを再検討し、ロトルーの作品全体、特に喜劇について考えていきたい。

注

1)戸張智雄、『ラシーヌとギリシア悲劇』、1967 年、東京大学出版会、24 頁

2)ウォルカティウス(前 100 年頃)はローマ喜劇を評価し、カエキリウス、プラウトゥス、ナエティウス、テレンティウスの順とした。

3) *Oeuvres de Jean Rotrou* par Viollet-le-duc.1967.T.I.
17 世紀フランス演劇研究、《エイコス》、第 9 号、1995 年、梗概

4)例えば、『コルコスのアジェジラン』

5)アリストテレス、『形而上学』、出隆訳、1961 年、岩波文庫、(上)169 頁

6) *Viollet-le-duc*.1967.T.III.
鈴木康司、《Rotrou の Sosie と Molière の Sosie》、中央大学紀要、第 59 号、昭和 46 年
同、『下僕像の変遷に基づく 17 世紀フランス喜劇史』、昭和 54 年、大修館書店

7)アリストテレス、同上、(上)85 頁

8) *Viollet-le-duc*.1967.T.IV.
《エイコス》、本第 11 号、1997 年、梗概

9)アリストテレス、『詩学』、1452b